

《資料館便り》

平成 26 (2014) 年

8 月号

石川町立歴史民俗資料館は、町の文化財保存と活用、町民の教育、学術及び文化の発展を目的に、昭和 49(1974) 年秋に開館しました。公的施設としては、県下のさきがけの一つです。

○「資料館便り」編集：発行 石川町立歴史民俗資料館
歴史民俗資料館長 三森孝則
〒963-7845 石川町字高田 200-2 0247 (26) 3768

いいもりさとやす 『飯盛里安博士関連資料』の整理

○今年度当館が行っている業務に、「飯盛里安博士関連資料」の整理があります。飯盛博士は東京帝国大学で放射性鉱物を研究し、卒業後、大正 6 (1917) 年、理化学研究所（理研）に入りました。大正 8～同 10 (1919～1921) 年にはイギリスに留学し、放射化学の研究を深めました。

明治 18(1885)年～昭和 57(1982)年：石川県金沢市出身。少年時代は富山県高岡市で過ごしました。



石川産の石英が原料となった人工宝石

帰国後、理化学研究所に戻り、飯盛研究室を主宰します。そして、国内外の放射性鉱物について探査・研究を進め、石川地方にも大正 11 (1922) 年と昭和 10 (1935) 年にその足跡を残しました。

アジア・太平洋戦争(昭和 16～同 20: 1941～1945 年) の時代は、軍用物資に利用さ

れるさまざまな元素を放射性鉱物から取り出す業務に従事することになりました。特に、陸軍が理研に委託して始まった原子爆弾開発研究（「二号研究」）では、飯盛研究室がその原料調達を担当しました。

昭和 20 (1945) 年 4 月、B29 の空襲を逃れ、飯盛研究室は東京からこの石川町に疎開して来たのです。その大きな理由は、本町がさまざまな鉱物の産地であったからに他なりません。工場は高田に建設中であったジルコン選鉱場を転用しました。（現在の県立石川高校、町公民館、当資料館の敷地です。）

博士の研究室は当時の旧制石川中学校（現学法石川高校）の一室を借用しました。同年 7 月初め、飯盛家は家族で石川に移住しました。間もなく戦争が終わりましたが、一家は昭和 21 (1946) 年 3 月、字下泉の乗蓮寺近くに新居を構え、昭和 24 (1949) 年 11 月まで生活したのです。



下泉（愛宕山の下）に新築された飯盛家



石川山での飯盛博士家族：右端が飯盛里安博士（昭和 22 年か 23 年）

日本を代表する化学者がこの石川町に四年間も住んでいた事実は重いものがあります。戦後四年の間に、博士は石川地方の鉱物（特に石英）を原料として、人工宝石の開発にも力を入れました。

昨年出版した「ペグマタイトの記憶」（前号に紹介しました。）は、博士の御子孫から寄せられた日記、書簡、実験記録等を中心にまとめたものです。これらは単に石川町だけでなく、我が国全体の化学に関する重要な資料といえます。

現在、橋本悦雄氏（石川町文化財保護審議会委員）が中心になって、その整理・解析を更に進めているところです。